

影の下の湖畔にて

池田 圭

「皆既が終る……」

今回で3回目を数える皆既を見に来た私は、皆既の1時間前に、そんな言葉を発していた。

計画は随分前から立て始めていた。しかしながら、具体的なスケジュールや購入品を決めたのは約1ヶ月前。相変わらず準備の悪いこと。後でしっかり反省することになった。

メンバーは、過去に見た2回のシャドーバンドの話がきっかけで、大学の研究室がいっしょだった永森氏と、その彼の奥さんと3人。約10日間のフィンランドの旅である。私だけは、その後も北欧に残り、車でボスニア湾を一周して帰って来たが。

送られて来た日食情報をもとに、「んん、JOENSUUにしよう」と決め、観測項目や、旅をどう楽しむか、あれこれ考えた。日食の撮影やドライブ、沈まない太陽、等いろいろ考えている時は、結構ワクワクしていたのだが、いざ“かかる費用”を目の下に並べていると、悩む必要が何処にあったか不思議な位だった。

友達2人は、皆既は初めてとあって、観測項目は特に提案せず、双眼鏡だけは持たせることにした。私は、前回小笠原で撮った8mmビデオに続き、今回はHi8で撮ることにし、SONYのCCD-V700を購入、メインをビデオ撮影と決めた。そしてもう1つ、いろいろ考えた末、先輩から180mmのレンズを借り、「湖面に映るコロナ」の写真撮影を行うことにした。

前日の朝方は、友達からのモーニングコールで起きた。なんとお互いに寝坊し、外は明るくなり始めていた。車をとばせるだけとばし、これが明日なら、皆既の終わった直後（のはずだった）という時刻に、下見の結果決めたポイントへ着いた。そしてそこには、全天ベタ曇りの中、湖面から上のわずかなすき間に、翌日の日食を待ちかねた太陽が挨拶していたのである。（本当に待ちかねていたのは、私だったが）

ただ、私はどうも妙な気がしていたのである。「どう見ても、あの太陽の高度が4°あるとは思えない。しかし、明日のこの時間にこの景色が再現すれば、皆既は見れる」と。そう、この予想は、大方当たっていた。

当日は、ホテルを0時すぎに出発した。大越さん達は、この頃まだ、用意に追われていたらしい。観測ポイントに向かう途中考えた事は、3つあった。1つは、無事に観測ポイントまで事故らずにたどり着くこと。次に、観測ポイント、すなわち長さ20m足らず、幅2m位の栈橋の先端に、誰もいないこと。そして最後に、前日の風景が再現すること、であった。

出発して約20分後、その3つのうち、初めの2つが先ず実現した。と言っても、栈橋の近くには乗用車やキャンピングカーがすでに何台か止まっていた。ただ、早々に三脚を広げたのが我々

ただただである。この事は、前日のリハーサルの時点で、我々以外に誰もいなかった事から、予想はしていた。(でも実際は、心配だった)

皆既の時刻が近付くにつれ、少しずつ人が増えてきた。中にはドイツから車で来て、さっき着いた、という人達もいた。三脚のそばに、相変わらず白い布を広げていたので、「これは何なの」と、何度か尋ねられた。その度に、シャドーバンドの話をするのだが、これはなかなかうまく説明できない。そして、よせばいいのに、その布に各接触時刻まで書いておいた。そこで、「これはサマータイムの時刻か」と尋ねる人もいた。私は、前日の妙な感じを思い出した。

時間は過ぎた。太陽が見えそうな場所は人で埋まり、永森氏はだんだんと落ち着きがなくなった。私は落ち着きはらった振りをしていた。皆既の時刻まであと数分(のはずだった)という頃になっても、太陽は全く姿を出さない。時計を見ながら、それでもビデオだけは回しながら、「やはり飛行機が正解だったか」などと考えていた。

しばらくして、「残念だった」と思った私は、まわりの反応がどうしても納得できず、とにかく太陽を一目見るつもりで立っていたのだが、遂に自分の間違いに気付く時が来た。前日のリハーサルと同じという訳ではなかったが、だんだんと雲のむこうが見えはじめ、変な形をした太陽が姿を現わした。何故変か、と言うと、“これから皆既になる”太陽が見えたからである。

一回で二度がっかりする日食になるとは夢にも思わなかった私は、再び希望をとり戻し、今度は人々といっしょにザワザワし始めていた。そして……。

皆既が見られない状況は誰の目にも明らかになった。すき間をのぼった太陽は、再び雲の中に姿を隠し、曇り空の中、あたりは暗闇につつまれていった。

この1分半は、結構長かったのではないかと思う。時計を見ても仕方ないのに見てしまう。フィンランドに来て初めて味わった暗闇は、雲の上の耳ざわりな飛行機の音と共に、去っていったのだった……。

欠けた太陽が雲の中に消えた後、私は8mmのピントが甘いことに気付いた。これは、コンバージョンレンズを着けた結果、EDレンズの如く∞の先まで回ってしまう代物となってしまったからである。永森氏の奥さんの、「部分食だけでも、見れて良かった」という言葉で、今回の日食に一応の決着をつけ、各々安心して観光モードへと移って行った。

